

# セーシエルの歴史

平成 24 年 7 月 3 日(火)

セーシエルは、インド洋に浮かぶ美しい島国で、観光業と漁業が主な産業である。日本は 1976 年 6 月 29 日に独立と同時に承認した。

2001 年 8 月にセーシエル共和国を訪問した。今回、アフリカの歴史を学んで、改めてこの国の歴史を調べた。古くは無人島であったが、フランスの植民地になり、次いでイギリスの植民地となり、そして独立を果たした。その後、クーデターもあったが、現在は複数政党制の民主的な共和国である。



セーシエル、マヘ島 (2001 年 8 月)

## 1 セーシエル共和国の現状<sup>1</sup>

- i 面積 455km<sup>2</sup> (ほぼ種子島大、インド洋に浮かぶ約 115 の島からなる。マヘ島からアフリカ大陸 (ソマリア) まで 1300km ほど離れている)。排他的経済水域は 140 万 km<sup>2</sup>。
- ii 人口 8.8 万人(2009 年 : 世銀)、人口増加率 1.2%(2009 年 : 世銀)
- iii 首都 ビクトリア(マヘ島)
- iv 住民 クレオール(ヨーロッパ人とアフリカ人の混血)が多数
- v 言語 英語、仏語、セーシエル・クレオール語<sup>2</sup>
- vi 宗教 キリスト教(約 90 パーセント)
- vii 政体 共和制
- viii 元首 ジェイムス・アリックス・ミッシェル(James Alix MICHEL)大統領(2004 年、ルネ大統領の任期途中での退任を受け、憲法上の規定により、残りの任期期間について、大統領に就任。2006 年の大統領選挙の結果再任、任期 5 年)
- ix 議会 一院制国民議会 (定数 34、うち 25 議席が直接選挙枠、議員任期 5 年)
- x 政府 首相 なし  
外相 ジャン・ポール・アダム(Jean-Paul ADAM)

## 2 歴史<sup>3</sup>

### 植民地以前の歴史

<sup>1</sup> 主に外務省 HP の情報を参考にしてている。

<sup>2</sup> 基盤となっている言語が他言語との接触の結果著しく変容したものをピジン語といい、さらにピジン語がその地域の集団の母語となったものをクレオール語という。一般に、語彙・文法は単純化し、音韻は接触相手の言語の音韻体系の影響をこうむる。(ウィキペディア)

<sup>3</sup> 主に WIKIPEDIA(英語版)の情報を参考にしてている。

- 3世紀 ボルネオからのマレー人がセーシェルに留まり、最終的にマダガスカル島に入植した。
- 7-8世紀 無人島であったが、時折、アラブ人が来航。
- 851年 アラブ商人によって書かれた文書がモルジブと諸島(セーシェル)に言及している。  
アラブ人はセーシェルでしか見つけられない価値あるココナツを取引していた。

### 発見の時代

- 1502年 ヴァスコ・ダ・ガマがインドから東アフリカへの航海においてアミランテスとして知られた諸島(セーシェル)を目撃、アラブ人が活動しているのを見た。この花崗岩の島々はポルトガルの海図に「7人姉妹」として現れた。
- 1608年3月 イギリス東インド会社の商船がインドに向けて出港した。
- 1609年1月9日 イギリス東インド会社の商船「昇天 Ascension's」号の船員が島を見つけて向った。「池のような場所」に投錨した。この無人島には豊かな水があり、魚、ココナツ、鳥類、ウミガメ、巨大なリクガメがいて、備蓄することができた。「昇天 Ascension's」号は帰国して、この発見を報告したが、イギリスは何ら行動を起こさなかった。
- 17世紀末 カリブ海からインド洋に到達した海賊たちがマダガスカルに基地を築き、紅海やペルシャ湾に行き来する船を襲った。
- 1715年 フランスがモーリシャスを占領した。この植民地は次第に重要になっていった。
- 1735年 ベルトラン・フランソワ・マヘ(1699-1723)が総督に任命された。彼の任務はフランスのインド航路を守ることであった。マヘ自身も航海士で、モーリシャスからインドへのより速い航路を見つけることに関心をもっていた。
- 1742年 マヘ総督はマダガスカルの北方の諸島の正確な海図を作るためにラザレ・ピコを隊長とする探検隊を送った。11月21日に「エリザベス」号と「シャルル」号はマヘ島沖のアンセ・ボイリュに投錨した。探検隊は豊かな土地を見つけた。ピコはこの島をダボンダンス島と名付けた。ピコの海図は粗末なものだった。
- 1744年 フランスが再びラザレ・ピコを隊長とする探検隊を送り込んだ。最大の島はマヘ総督に敬意を表してマヘ島と改名された。
- 1746年 マヘ総督が交代して、島は再び忘れ去られた。

### フランスの植民地政策

- 1754年 イギリスとフランスの間の七年戦争が勃発して、この諸島に関してモーリシャスの権限が及ぶかが問題となった。フランスは領有権の主張のためにニコラス・モルヘイの率いる2隻の船を派遣した。モルヘイは最大の島をフランスのルイ15世治世下の蔵相の名からセーシェルと改名した。後にセーシェルは諸島全体の名前になり、マヘが再び最大の島の名前となった。
- 1756年11月1日 モルヘイがフランス王とフランス東インド会社のために領有を宣言。

七年戦争が終わり、フランスはカナダとインドでの地位を失い、フランス東インド会社の衰退を来したが、モーリシャスは正式に支配し続けた。こうしてモーリシャスとセーシェルはフランス王室直轄植民地となった。モーリシャスの新総督のピエール・ポワヴル(1719-1786)はカネになるスパイス交易のオランダ独占を打ち破ろうとした。彼はマヘはスパイス栽培に完璧だと考えていた。

- 1768年 流刑者を含むフランス人、アフリカ人奴隷、東南アジアの商人などが入植。ニコラス・デュフレソンは企業体を組織して、セーシェルで木材とカメを収集する船を派遣した。この探検でフランスの主権はクリスマスの日までにはセーシェル全土に広がった。
- 1769年 探検家のロッシュンとグレニアがインドへのより速い航路はセーシェルを経由すると安全であることを指摘し、この島の戦略的位置の重要さが現実のものとなった。その間にポワヴルがナツメグとチョウジの苗木と1万のナツメグの種子を手に入れた。モーリシャスとレユニオンでそれを繁殖させる試みはほとんど成功しなかったため、彼はセーシェルで行うことを考えた。ブライエ・デュ・バレ(不明-1777)がセント・アンでの植民地経営の国王の許可を持って自費でモーリシャスに着いたことは思いがけないことだった。
- 1770年8月12日 白人15人、奴隷7人、インド人5人、黒人女性1人がセント・アンに入植した。デュ・バレは資金を集めるためにモーリシャスにいた。最初の成功報告の後で、彼は政府に更なる資金援助を願い出た。しかし政府に届いた報告では船長たちは島から新鮮な産物の供給を得られていないというものだった。モーリシャスとベルサイユへ援助を求めるデュ・バレの陳情は聞く耳をもたれなかった。彼は状況を変えようとセーシェルに行ったが、無駄だった。彼は失望のうちにインドに発って、その後少ししてその地で亡くなった。
- 1771年 ポワヴルはアントワン・ジロをセーシェルに派遣して、スパイス農園を始めた。
- 1772年8月 デュ・バレが派遣した人々はセント・アンを捨てて、マヘに移ったり、帰国したりした。ジロはアンセ・ロヤルでナツメグ、チョウジ、シナモンと胡椒を生産した。
- イギリス船がセーシェル近海に現れるようになり、当局はロマンヴィル指揮の兵を派遣した。彼らは現在のビクトリアの地に王室直轄植民地を設置した。ジロは名目的には入植者保護の任務を負っていたが、実際の権限はなかった。
- 1778年 フランスとイギリスの間で戦争が始まった。
- 1788年 モーリシャスは交代に気鋭のジャン・バプティスト・フィロジェン・ドゥ・マラヴォワを送り、植民地の指揮を担わせた。彼は30の規則を制定して、木材やカメを保護した。このことが将来の健全な農業技術と資源の注意深い節約になった。

## クインシーの時代

1790 年

フランス革命の結果、入植者は植民地議会を設置して、自ら定めた憲法に従って、植民地を経営すると決めた。セーシェルの土地は現在の入植者の子孫だけのものであり、植民地の産物はモーリシャスの決定ではなく彼らの選択で処分するべきであった。奴隷の労働なしでは植民地は存続できないので、奴隷制を廃止することは不可能であるとみていた。

1794 年

ジャン・バプティスト・クオ・ドゥ・クインシー(1748-1827)が植民地の司令官に就いた。彼はこの先の戦争の時期を通してセーシェルを熟練で適宜に経営した。セーシェルはフランスの(略奪を公認された)海賊にとっては避難場所の役割を果たした。クインシーはこのことが知れ渡らないことを望んでいたが、1794年に3隻のイギリス艦隊が現れて、ヘンリー・ニューカム提督がクインシーに降伏のために1時間を与えた。狡猾な交渉の後にクインシーは名誉と財産を保障されて降伏した。イギリス海軍のものにはなったが、セーシェルを獲得するのに努力しなかった。資源の無駄になると考えていたのだ。入植者たちには駐留兵が送られなければ、フランス国旗を守ることは期待できなかった。そこで入植者たちは中立を守り、新来の者に物資を供給した。その戦略は功を奏して、植民地は繁栄した。クインシーの有利な降伏条件はイギリス船が訪問するたびに7回も改定された。

1801年7月11日

フランスのフリゲート艦シフォンヌがナポレオンに追放された囚人を乗せて到着した。その後イギリス海軍のシビルが到着した。クインシーはシフォンヌを守らなければならなかったが、短い戦闘の後でシフォンヌは占拠された。シビルの船長アダムはクインシーがなぜ降伏条件に違反して干渉したかを知りたかった。クインシーは困難もなく彼の方法で交渉することができた。さらにアダムを説得して、セーシェルの船が「セーシェルの降伏」と書かれた旗を掲げてイギリスの封鎖を通過して安全にモーリシャスに行くことを許された。

1801年9月15日

植民地沖で記憶に残る海戦が闘われた。イギリス船ビクターは艀装に深刻な損害を受けて航行不能になったが、フランス艦ラ・フレシェの舷側に画策し、機銃掃射して火災を起こさせた。ラ・フレシェは沈み始めた。降伏をするよりも船長は船を放棄する前に放火して座礁させた。敵同士は後に沿岸で面会して、イギリス司令官はフランス司令官に彼の勇気と戦闘技術を称えた。

イギリスはフランスのインド洋植民地の封鎖を強化した。レユニオンは降伏した。

1810年12月

モーリシャスが降伏した。セーシェル諸島がイギリスに引き渡された。

1811年4月

ビーバー船長がニスス号でセーシェルに到着して、クインシーの優先的降伏条件は有効であることを宣言したが、セーシェルはモーリシャスの降伏条件を認めなければならなかった。ビーバーはバソロミュー・サリバン副官の王室海軍を後に残して、セーシェルの状況を監視した。

## イギリスの支配

入植者がフランスのフリゲート艦や奴隷所有者に物資を供給し続けているのをやめさせる方法がサリバンにはほとんどなかった。当時は奴隷の取引は禁止されていたが、奴隷の所有はイギリスの法律に違反してはいなかった。サリバンは後に市民の代理人と言われたが、奴隷所有に賛成の入植者と追いつ追われつの役割を演じた。密告があればサリバンはプラスリンに行って、新しく上陸した奴隷を押収した。しかし多くは挫折し、成功はほんのわずかだった。サリバンはセーシェル人は名誉、恥、正直の意識をもってないと不満を漏らしながら退任した。

最初のイギリスの文民の総督はエドワード・マッジだった。彼はクインシーと苦い確執があった。クインシーは治安判事として当局に留まっていた。この後の数年は島に静かな沈滞が進んだ。気まぐれな市場で生産物の目標を達成することは必ずしも容易なことでなかったが、セーシエルの土地所有者は快適な生活を送っていた。英国はフランスの慣習が続くのを許した。ロンドンへの報告では総督はイギリスだったが、フランスの規則に則って治めた。入植者が新支配者と共に最も苦しんだことは植民地がモーリシャスに依存していることだった。

- 1814 年 イギリスも島国モーリシャスの一部として領有を主張。以来、支配権をめぐりフランスとイギリスが対立。
- 1815 年 パリ条約により、フランスがイギリスに領有権を譲渡、正式にイギリス領になり、モーリシャスの属領となる。
- 1835 年 入植者にとってのもう一つの憂鬱はイギリスの反奴隷制法だったが、この年に完全に奴隷制は廃止された。農園はすでに衰退し始めており、土壌は肥沃にする投資を欠いていたので痩せ細っていた。入植者のうちには奴隷を解放した者もいた。自由にされた奴隷には土地がなく、これまで拘束されていた土地に居座った。植民地は停滞の時期に入った。輸出するものもなく、新たなインフラに投資するカネもなかった。
- 入植者が綿花、砂糖、米、トウモロコシなどの伝統的な穀物ではなく、少ない労働力で大きな利益を上げることができるココナツを栽培することを思い付いたときに状況が改善した。間もなく彼らは事実上無料の労働力を使い始めた。
- 1830 年代 奴隷制の廃止がヨーロッパ人入植者から労働力を奪い、綿花と穀物の栽培からココナツ、バニラ、シナモンなどの労働集約的な作物に変えさせた。イギリスは奴隷制反対の姿勢を採っていて、東アフリカ沿岸で中東へ奴隷を運ぶアラブのダウ船を捜索するパトロールを行っていた。赤道の南で解放された奴隷はセーシェルに連れて来られ、プランテーションの所有者に引き取られた。彼らは土地と賃金を得るために働いた。1861 年からの 13 年間でおよそ 2400 人の男性、女性、子供がセーシェルに連れて来られた。1841 年からビクトリアと呼ばれるようになった町は発展した。
- 1862 年 8 月 12 日 暴風雨がマヘを直撃した。丘から土砂がなだれ込んで来た。70 人以上が亡

くなつたと推定されている。

1872 年

セーシェル独自の行政審議会、立法審議会ができた。

1879 年

許可証が与えられてビクトリアでビジネスができるようになった。薬種商 1 人、競売人 2 人、小売人 5 人、酒屋 4 人、公証人 1 人、弁護士 1 人、宝石商 1 人、時計職人 1 人がいた。

### 王室直轄植民地

セーシェルは自らの権利として植民地になることを望んだし、母体の植民地のモーリシャスの当局もそれを支持した。モーリシャス総督のアーサー・ゴードン卿がロンドンに代理の請願者を送った。譲歩がなされたが、セーシェルは 1903 年にアーネスト・ビッカム・スイートーエスコット卿が総督に就任するまで王室直轄植民地となることはできなかった。

1903 年

モーリシャスから分離して、イギリス王室直轄植民地となった。新しい地位にふさわしくビクトリアの中心に植物園と時計塔ができた。しかしフランスの言語と文化は支配的なままだった。

フランスと同様にイギリスもセーシェルを厄介な政治犯を追放する役に立つ土地と見ていた。何年にも渡りセーシェルはザンジバル、エジプト、サイプラスとパレスチナからの囚人の行きつく場所となった。最初の追放は 1875 年にペラクのイギリス住民を殺害したことをほのめかして到着したペラクの元スルタンだった。後から続く追放者と同じように彼はセーシェルの生活をうまく続けて、この島が純粋に気に入った。彼はこの地方の民俗的なメロディーを持ち帰り彼の国の国歌に入れた。それは後にマレーシア国歌となった。

おそらくもっとも有名な政治犯はサイプラスのマカリオス大司教だろう。彼は 1956 年に着いた。彼も同様にこの刑務所に恋した。船が港を離れるときには、私たちはセーシェルの多くの楽しく優しい思い出を持って行くだろうと書いた。

1917 年

第 1 次世界大戦はこの島に大きな困難をもたらした。船舶は重要な物資を運び入れることも運び出すこともできなかった。賃金は下がり、物価は 150%も上がった。多くの犯罪者が出て、刑務所はパンクした。スマッツ司令官の要求で設置されたセーシェル労働派遣団に加えて脱出させた。しかし容易な選択肢はなかった。800 人以上が東アフリカに派遣された。ちょうど 5 か月が経った頃多くの人が赤痢、マラリア、脚気で亡くなり、派遣団は戻ってきたが、結局 335 人が死んだ。

第 1 次世界大戦が終わるまでにセーシェルの人口は 2 万 4 千人になっており、彼らはイギリスから無視されていると感じていた。セーシェルの統治を代表する新組織の入植者協会には動揺が広がっていた。

1929 年

植民地開発法によって自由なファンドの流れが確保されたが、経済恐慌の時期で、コプラの価格は下がり、賃金も下がった。労働者は貧弱な労働条件と税負担について陳情した。総督のアーサー・グリーンブル卿は低収入者の課税を免除する改革を始めた。彼はモデルハウスの創設と土地を持たな

	い者に小農地を分配することに熱心だった。彼の改革の多くは第2次世界大戦が始まるまで承認されず、すべてが保留となっていた。
1937年	入植者協会は白人土地所有者に陳情したが、声とはならなかった。有色人同盟が最低賃金と賃金法廷とすべての人の無料健康ケアを要求して結成された。
1939年	第2次世界大戦中に水上飛行艇の格納場がセント・アンに置かれてこの地域を通過する船舶の監視に当たった。島には駐屯地が置かれ、港を守るためにポワント・コナンに砲台が建設された。2千人のセーシェル人がエジプト、パレスチナ、イタリアのパイオニア会社で働いた。 セーシェル自体も混乱していた。最初の政党である納税者協会が1939年に組織された。イギリス総督は「セーシールのすべての反動勢力の具体化」と表現した。それは完全に入植者の利益の保護に関わっていた。
1948年	戦後に選挙権を与えられたが、3万6千人のうち読み書きができて財産を所有する者2千人に限られていた。1948年に最初に行われた選挙で立法審議会に選出されたほとんどの議員は予想通り入植者協会と納税者協会の会員だった。
1952年	独立派のフランス＝アルベール・ルネとイギリス領派のジェイムス・マンカムによる政党が組織された。
1958年	フランスはグロリオソ島をセーシェルから取り戻した。
<u>独立</u>	
1964年	これまで新しい政治運動はなかったが、セーシェル人民統一党（SPUP、後にセーシェル人民進歩党、SPPF）が組織され、フランス＝アルベール・ルネに率いられて、社会主義とイギリスからの独立運動をした。同年に結成されたジェイムス・マンカムのセーシェル民主党（SDP）は対照的に経済人と入植者を代表して、イギリスへの接近と統合を要求した。
1965年	アメリカに貸与していたデロッシュ島、アルタブラ諸島、ファーカー諸島がイギリスに戻った。
1966年	選挙が実施されて、SDPが勝利した。
1970年3月	セーシールの植民地と政治の代表でイギリスへの近接した統合を主張するジェイムス・マンカムのセーシェル民主党（SDP）と独立を主張するフランス＝アルベール・ルネのセーシェル人民統一党（SPUP）が憲法の制定のためにロンドンで会合した。
1970年11月	選挙が行われ、成人普通選挙と過半数で選挙された行政審議会を設置する新憲法が施行され、マンカムが首相に就いた。
1974年4月	選挙が行われ、2大政党とも独立を主張をした。この選挙の結果、英国との交渉でセーシェルは1976年6月29日に英連邦内で独立共和国になることが合意された。新しくナイトに叙されたジェイムス・マンカム卿が最初の大統領になり、ルネが首相になった。この交渉で1965年にセーシェルから英国インド洋領土（BIOC）の一部に編入されていたアルダブラ諸島、ファーカー諸島、デロッシュ島が独立とともにセーシェルに返還された。

- 1975年 自治政府が発足。マンカム大統領とルネ首相が連立した。
- 1976年 制憲会議が行われた。
- 1976年6月28日 英連邦の一員として、英国より独立し、憲法が発布された。
- 1976年9月21日 国連加盟。
- 1976年 マヘ島にアメリカの人工衛星追跡ステーションが設置された。

#### 一党制体制

- 1977年6月5日 クーデターでマンカムが退位させられ、フランスーアルベール・ルネが実権を握り、大統領となった。セーシェル人民統一党（SPUP）がセーシェル人民進歩党（SPPF）と名を変えて一党体制となった。
- 1978年 憲法を社会主義志向のものに改変。一党制宣言(セーシェル人民進歩党：SPPF)。以後一党独裁政権が続く。
- 1981年 マイク・ホアレと南アフリカ傭兵団によるクーデターの試みが失敗に終わった。作家のジョン・パーキンスはこれはアメリカ合衆国がディエゴ・ガルシア軍事基地にアクセスする問題に関わってアメリカに近い前大統領を再び据えようとする秘密行動であったと断言した。
- 1982年 政府は再び軍の反乱に脅かされたが、2日後にタンザニア軍によって強化された忠誠を誓った軍によって反乱軍の基地を奪回して鎮圧された。
- 1984年 ロンドンでSNM/MPRの亡命リーダーの暗殺があった後で、セーシェル亡命コミュニティのジェラルド・ホローはSIROPーセーシェル国際帰還推進プログラムを始めた。それはCDU、DP、SNPとの同盟に関わって、強力な経済プログラムにサポートされた亡命者の平和的帰国のための交渉を描いていた。ルネ大統領再任。

#### 民主主義の回復

- 1989年 ルネ大統領再任。
- 1991年12月4日 ソビエト連邦の崩壊に引き続いて、セーシェル人民進歩党（SPPF）特別会議で、ルネ大統領はほぼ16年の一党制の後で複数政党制への回帰を宣言した。
- 1991年12月27日 セーシェル憲法は政党の登録を認めるように修正された。セーシェルに戻った亡命者の中にはジェイムス・マンカムがおり、1992年4月に民主党（DP）を復活させた。月末までに移行期の最初のステージで争うために8政党が登録を済ませた。
- 1992年7月23日 憲法委員会選挙が行われた（26日まで）。  
憲法委員会はSPPFから14人、DPから8人の22人の選挙された委員で構成された。
- 1992年8月27日 憲法委員会はルネ大統領とマンカムに国家的和解と新民主憲法の合意を呼びかけて始まった。
- 1993年5月7日 合意文書がつくられ、その承認のための国民投票が6月15日から18日に決まった。憲法草案は選挙民の73.9%の賛成、24.1%の反対で承認された。
- 1993年7月23日 最初の複数政党制の大統領選挙、国民議会選挙が新憲法の下で実施された（26日まで）。ルネ大統領が勝利した。SPPF、DP、統一野党（セセルワ



党を含む3小政党の合同)の3つの政党が選挙で争った。他の2つの小野党はDPに投票した。すべての参加政党と国際監視団は結果を「自由かつ公正」として受け入れた。

- 1998年3月20日 第2回大統領選挙でアルベール・ルネ(SPPF)、ジェイムス・マンカム(DP)、ワベル・ラムカラワンの3人が争ったが、再びルネ大統領とSPPFが地滑りの勝利を挙げた。選挙での大統領の人気は1993年の59.5%から1998年の66.6%になり、国民議会選挙でSPPFは1993年の56.5%から1998年には61.7%を獲得した。
- 1999年 マンカムは中道リベラルのセーシェル国民党(SNP)に転じて、最大の野党になった。
- 2002年12月 国民議会選挙でSNPは42%を獲得したが、SPPFに敗れた。
- 2004年7月 SADC(南部アフリカ開発共同体)とIOR(環インド洋地域協力連合)から、財政事情を背景に脱退。
- 2004年 ルネ大統領が前副大統領で長い間の盟友のジェイムス・ミッシェルに交代した。
- 2006年7月 第4回大統領選挙でミッシェル大統領がSNPのリーダーのラムカラワンに53.5%で辛勝した。
- 2007年5月 国民議会選挙が実施され、議席数に変動はなく、与党が23議席を維持した。
- 2008年8月 財政事情改善に伴い、SADC(南部アフリカ開発共同体)に再加盟。
- 2009年6月 与党は「人民進歩党(SPPF)」から「人民党(Parti Lepep)」に改名。

#### 参考資料

Republic of Seychelles <http://www.republicofseychelles.com/>

WIKIPEDIA [http://en.wikipedia.org/wiki/History\\_of\\_Seychelles](http://en.wikipedia.org/wiki/History_of_Seychelles)

Encyclopedia Britannica 2004

ブリタニカ国際大百科事典

外務省 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/seychelles/data.html>

ウィキペディア

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%BB%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%82%A7%E3%83%AB#.E6.AD.B4.E5.8F.B2>